

【書評】

**東洋大学福祉社会開発研究センター編集**  
**『つながり，支え合う福祉社会の仕組みづくり』**  
 (中央法規出版，2018年，A5判，312頁，3,456円)

沖 倉 智 美  
 (大正大学)

はじめに

本書は「はじめに」によると，東洋大学福祉社会開発研究センターが取り組んできた5年にわたる研究の成果の一部であり，第1期の成果は2011年に、『地域におけるつながり・見守りのかたち—福祉社会の形成に向けて—』（中央法規出版）として刊行されているとのことである。第2期は，前期の成果を踏まえて，「高齢者，障害者，子どもの社会的孤立に対応する見守り支援・自立支援に関する総合的研究」をテーマに，高齢・障害・子どもの3ユニットと分野の枠を越えた共通基盤を担う理論・歴史グループとで，社会的孤立に対するシステムや支援方法のあり方を検討している。

本書は，東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科の所属教員やその修了者等，総勢21名の論考からなる。書評を始めるにあたり，このような大がかりな研究プロジェクトに継続的に取り組まれた執筆者，関係者各位に敬意を表したい。多様な背景を持った研究分野の異なる研究者が，大学という所属組織の共通性に寄り添って，各々のユニット・グループの研究成果を共有し，発展させていくことは容易なことではない。

縁あって，評者は障害ユニットが開催したシンポジウムに，数回参加させていただいた経験があり，そのことで今回，書評を担当するようお声掛けいただいたのではないかと考えている。シンポジウムでは，研究協力者としての障害当事者が，客体として位置づけられるのではなく，ともに成

果を生み出す主体として参画をしていたことが印象に残っている。本書においても，実践に即して現場とともに研究する姿勢は，確実に貫かれている。

本書の概要

本書の各章・節すべてを網羅して評するには，評者の力量はあまりにも乏しいし，紙幅の関係からも難しい。評者は，共同執筆された書籍を読む時，全体のテーマと各論の配置といった構成のあり様が気になる。このことを検証するためにも，目次を掲載することで全体を概観しつつ，その主張するところは，センター長である森田明美氏による「序章」と，最終部である理論・歴史グループ所属の3名による「第3部」を中心に紹介することでお許しいただきたい。

序章：つながりを求めて—当事者主体の暮らしを実現するための福祉に必要なこと—

(森田明美氏)

序章では，本書の基調として，まずつながりにくくなっている原因として，①家族が伝統的に持っていたつながる力が弱くなっている，②社会が個人に当事者性や主体（とあるが「性」の脱字ではないかと思われる）をもてなくさせているを挙げ，当事者が必要とするサービスを探すとき，サービスにつなぐ人や場が容易につながるところにあることが必要になり，社会福祉の支援は，当事者の暮らしに寄り添い，考えた結果，そのサー

ビスがなければ必要なサービスを創り出さねばならないときもあるし、つくり変えることもあるとする。

また、つながりにくさの生じる原因は、①つながる力がない、②つながる気持ちになれない、③つながる力をもっているが使えない、届かないを挙げ、こうした状況から脱却するために、つながる力を育てることが必要とし、本書の中で地域生活のために探られた新しい取り組みは、①つながる力をつけるための支援、②つながりやすい場の創出、③つなぎ役を暮らしのなかに配置する、④当事者主体の地域をつくるための支援者研修であるとし、つながりを深く進めるためには、①つなぐための「見える化」の努力、②個人の問題を社会化し、制度やシステムにすること、③継続的な支援が必要であるとしている。

そして、つなぐ先に見える希望を一緒に探し出していくために、つながるための工夫と努力をどのような方法によって認識し、自らが変わり、支援をつくり変える挑戦をするのかが、社会福祉関係者に問われているとしている。

## 第1部：地域で起きている「つながりにくさ」

### 第1章：高齢者の地域生活困難と支援

第1節：支援につながりにくい事例に対する地域福祉実践 (加山弾氏)

第2節：インフォーマル支援とフォーマル支援の「つながりにくさ」と「つなぎ方」 (小林良二氏)

第3節 中国帰国者が日常生活で抱える困難と支援 (荻野剛史・門美由紀氏)

### 第2章：障害者の地域生活困難と支援

第1節：障害者総合支援法における協議会と当事者 (高山直樹氏)

第2節：障害者施設における「つながりにくさ」と当事者活動 (丸山晃・小泉隆文氏)

第3節：スポーツを通じてつながるスペシャルオリンピックスの実践 (志村健一氏)

### 第3章：子どもの地域生活困難と支援

第1節：地域社会における母子家庭の生活とその援助過程の「見える化」

(小林恵一氏)

第2節 被災地における子どもの意見表明・参加と児童福祉課題 (清水冬樹氏)

第1部では、地域生活困難と支援という視点から、各章で高齢・障害・子ども分野の「つながらない」フィールドに入り込み、当事者や実践者とともに活動することを通して、新しいつながりを模索し、つながりの構築にかかわる、あるいはその変化・変容を紹介している。

## 第2部：地域における福祉社会の開発

### 第4章：つなぐ実践を支える理論・視座

第1節：当事者支援とアドボカシー

(望月隆之氏)

第2節：知的障害者の自己決定支援と意思決定支援 (木口恵美子氏)

### 第5章：つなぐ実践を支える関係づくり

第1節：住民の見守りネットワークをつなぐ (野崎瑞樹氏)

第2節：当事者との間に立つコーディネーター (上田美香氏)

### 第6章：つなぐ実践を支える人材育成

第1節：専門職の研修システム

(我謝美左子氏)

第2節：市民レベルの組織づくりと人材育成 (渡邊浩美氏)

### 第7章：つなぐ実践を支える組織と資源

(伊奈川秀和氏)

第2部では、つなぐ実践を支えるための、「理論・視座」を紹介し、多様な主体間の「関係づくり」を例示し、「人材育成」について論じ、第7章で、全体を俯瞰する、つながるための「組織と資源」の現状と課題を分析するという4つの切り口で検討している。

## 第3部：福祉社会をどう開発するか

第8章：相模原障害者殺傷事件からみえること (稲沢公一氏)

第9章：「つなぐ」関係からみた日本の社会構造

(金子光一氏)

第10章：つながりによる援助の利用可能性について  
(秋元美世氏)

第3部では、これまでのように個別具体的な場面に当てはめながら議論するのではなく、福祉社会の開発・展開という観点から、つながりという営みを一般的・理論的な分析枠組みに位置づけ、考察することに挑戦している。

第8章では、相模原障害者殺傷事件を生み出した思想的背景に対して、条件的評価によって人をとらえようとする「機能原理」と無条件に肯定する「存在原理」という2つの原理によって考究することを目的としている。「自分のことは自分で」という思い込みや、機能原理に基づき「できる/できない」を「線引き」する社会にひろがる不寛容さの空気が事件を後押ししたとしている。存在原理のみが機能原理の暴走を止めることができるが、原理自体が根拠をもたないことから生じる脆弱さを抱え込んでおり、存在原理をマクロレベルで必要条件としつつ、ミクロレベルで一人ひとりと「つながり」を築いていく覚悟が求められていると結んでいる。

第9章では、「状態・性質」を表すフレンドシップ (friendship) やパートナーシップ (partnership), キンシップ (kinship), 「身分・地位」を表すメンバーシップ (membership) やシティズンシップ (citizenship), コムラドシップ (comradeship) を用いて、「つなぐ」関係から日本の社会構造を社会福祉史の視点で検証している。

戦前の救済や高度成長期の「日本の経営」は、古典的な家族を想定して展開され、キンシップに要求される機能水準と現実に遂行可能な水準との乖離が浮上して「家族問題」を構成したとし、「福祉見直し論」が登場した1973年の転換期以降においても、「日本型福祉社会論」は出発段階からキンシップやフレンドシップを基盤とした福祉国家の形態をとどめていたとしている。その後の雇用状況の悪化による家族問題の急増に対して、政府は「地域の力」に期待するプランを次々に提示したが、シティズンシップの確立が未整備ななかで、新たなメンバーシップやコムラドシップに過度に

期待し、それらに解決困難な課題を押し付けているような印象すら受けると指摘している。これに対して、公的機関の責務を前提として、シティズンシップの連帯（共通の権利の結合）の確立を優先し、その上でコムラドシップ型の多様な「相互承認の場」を創造することで「つなぐ社会」は構築されると提言している。

第10章では、つながりによる援助の利用可能性に関して、「つながりの属性」と「つながりの強度」をめぐる問題について検討を加えている。前者では、つながりの多様性や個性を踏まえた上で、そのつながりを維持するために求められることになる一定の役割期待があり、その役割が果たされないとき、当事者の生活のしづらさや困難に直結する可能性が高いと指摘している。後者では、グラノヴェッター (Granovetter, M.S.) の「弱い紐帯の強さ」に関する議論を踏まえ、つながりの強度は、①現実の強度は、ともに過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ、助け合いの程度などの実質的な要因で最終的には決まること、②強い紐帯の方が弱い紐帯よりも常により望ましい関係性となるわけではないことを導き出している。つながりから得られる援助の利用可能性に関しては、ウェルマン (Wellman, B.) の議論から「親密さ」、「近接性」、「接触頻度」、「弱い紐帯」を挙げている。

これらを踏まえ、機能低下しているつながりの有する援助機能を再認識して復活させていく取り組みが注目されているが、単純に復活させればよいというわけにはいかないと指摘し、現実可能な「つながり」を用意することで、生活困難問題を抱えている者とそれに対処するための制度との橋渡しをし、その存在を制度の側が知ることができるようにすること、さらに早期発見や予防活動につなげていくことが必要であり、この橋渡しの役割には地域社会のなかでさまざまな形で存在している緩やかなつながりを利用することが有効であると主張している。

この章立ては、序章の「おわりに」に示された、図表1「つなぐ社会」を構築するためのシステム

の構造化（作図：金子光一氏）に基づいてなされたものと考えられる。冒頭で紹介した第1期の成果である前著と比して、本書はつながりにまつわる多種多様な切り口と、その相互の関係性を整理することに挑戦することで、つながりを可視化しようとしていることがわかる。扉で各部の概要をガイドしてはいるが、欲を言えば、最終章に序章の枠組みと呼応する内容で、本書全体を総括する論考があると、より読者にその主張が伝わりやすかったと思うのだが、いかがだろうか。

## 総括と今後の課題

つながりを活用し、支え合いを構築することは、地域共生社会の実現に向けた「我が事・丸ごと」の地域づくり等、地域を基盤とした取り組みが求められている今、時宜を得たテーマである。本書と時期を同じくして、松本卓也・山本圭編著(2018)『<つながり>の現代思想 社会的紐帯をめぐる哲学・政治・精神分析』(明石書店)という書籍が出版された。サブタイトルからお判りいただけるように、つながりを各々の学問領域から論じている。本誌がソーシャルワーク学会誌であることを考慮すると、ソーシャルワークにおけるつながり論とでもいうべき視点は何かを考えるに至った。

浅学を顧みずに述べれば、本書から読み解く地域支援システムにおけるソーシャルワークの目的は、細分化・断片化された当事者個人の生活を、地域で再統合することにあると考える。つながりは、その取り組みの連続性や継続性を担保するためには必須であるし、当事者とともに支援を請い、得られた支援を編んでいく人としてソーシャルワーカーは存在するべきである。その取り組みを実効性のあるものにするためには、以下のようなつながりを地域に生み出していかなければならない。

①対象…児童・高齢・障害という分野で対象者を限定せず、地域に暮らすすべての人々を対象とすること

②領域…狭義の福祉だけを対象とするのではなく、関連領域としての保健医療や雇用就労、教育、

司法等と切れ目なくつながっていること

③サービス…サービス間のネットワークが形成され、フォーマルとインフォーマル、営利と非営利とを必要に応じて連動させ、動員できること

④時間…ケアマネジメント過程やPDCAサイクルを経ることにより、長期にわたるフォローアップ体制が確保できること

⑤空間…施設か地域かの二者択一ではなく、その時々でもっとも相応しい場所で暮らすことができること

⑥役割…固定的ではなく、ある時は利用者、ある時はサービス提供者や支援者になることができること

におけるつながりであり、さらにその機動力となるソーシャルワーク的なつながりとして、

⑦システム…ミクロからメゾ、マクロ各階層での取り組みが相互に関連していること

⑧方法…ケースワーク・グループワーク・コミュニティワークといった単体の援助技術から、個別支援と地域支援とを視野に入れ、地域を基盤としてこれらの技術を連動させることができること

以上の8つを踏まえた社会的紐帯をつくり出すことが重要である。

さらに、つながる方法に関しては、以下の5点を検討する必要がある。

①量…本書で取り上げている点から線、面へ(第7章)といった「広さ」や「強度」(第10章)だけではなく、性質との関連から、切れにくい、つながり直しがしやすいといった「深さ」にも着目すること

②質…セルフヘルプグループのような「同質性」を基調とするだけではなく、多様な人々が混在するからこそその可能性を視野に入れた「異質(多様)性」のあるインクルーシブなつながりを生み出していくこと

③目的…本来、流動的・可変的であるはずの地域の会議体等が形骸化することがあるが、つながりの真の目的を確認するためにも、地域生活困難を抱えた当事者の積極的な参画を保障していくこと。つながることそのものがゴールではない。

④主体…他者によってつなげられた「消極的」なつながりは脆さを抱えているが，自ら「積極的」につながる主体性を確立することは容易ではない。自助や共助に過度な期待を寄せる政策の意図を踏まえつつも，自分たちが暮らす地域の支援システムを活性化させるチャンスとして取り組んでいくことも必要である。一人ひとりが所属組織や利害関係を越えて，「つながろう」と意識し，行動することによってのみ，人は有機的につながることができる。

⑤人材…そうは言うものの，現代ではつながりは自然発生的には生まれにくい。つなぐ専門職としてのソーシャルワーカーの存在は不可欠で，他の専門職とのスムーズな連携が，地域のつながりを促進する。また地域で暮らす「つなぐ人材」を

発見・育成していくことも重要な役割である。

本書が真価を発揮するためには，つながりを拒む，あるいはつながりに関心を持っていない人々に，収録された多種多様な取り組みを周知し，つながりへの参加を誘い，いかに主体に転換してもらうかにかかっている。相手の意思に関わらず見えてしまう状態をつくることで，発見や思考，対話，行動を促すような「見せる化」こそが，支え合いのモチベーションを高めるために求められる。奥行きも幅も広いつながりに関する実践や研究はこれからも続くと思われるし，本研究プロジェクトや個々の構成員がさらなる知見を「見せて」くださることに，大いなる期待を寄せたい。